

論 文

平成28年度小学校教育実習の成果と課題についての一考察 —成績評価表と意識調査の分析から—

山田修司・岩根浩・松井克行・松本大輔

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成29年10月25日受理)

A Study on the Successes and Challenges for Practice Teaching of Elementary School —A Study of Evaluation by Schools and Awareness Survey on Teachers—

Shuji YAMADA, Hiroshi IWANE, Katsuyuki MATUI, Daisuke MATSUMOTO

(*Department of Children's Studies*)

(Accepted October 25, 2017)

Abstract

The purpose of this study is to study on the successes and challenges for practice teaching of elementary school

The analysis methods were contents analysis of study of Evaluation by Schools and Awareness Survey on Teachers

As the result successes and challenges of practice teaching elementary school were four points.

Successes points were two.

- 1) Power of relationship with students
- 2) Basic manner as the student teachers

Challenges points were two.

- 1) Abilities lesson practice
- 2) Lesson plan and study on teaching materials

Especially lesson plan and study on teaching materials were a low evaluation.

Key Word : Practice Teaching of Elementary School 小学校教育実習
Evaluation by School 実習校評価
Awareness Survey 意識調査

1. はじめに

地域との連携による教員養成を目指し、佐賀市と協定を結んだ本学の子ども学部においては佐賀市内での小学校教育実習を行い、平成29年度の6月に行われた小学校教育実習で6回目を迎えている。今後、一層、地域との結びつきを強くし、質の高い教員養成を目指す本学において、実習指導の充実及び実習参加に関する基準の設定と、送り出す実習生の質を高めるような指導を行う必要がある。そこで本研究では、昨年度、平成28年6月に行われた小学校教育実習における受け入れ先の実習校の成績評価を平成27年度の実習校の成績評価と比較分析し結果を考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。

2. 研究方法

(1) 調査対象

平成28年度6月に佐賀市内にて小学校教育実習を行った本学4年生64名分の成績評価表（小学校教育実習受け入れ先26校）を対象とした。また、より詳細な分析のため、実習校にて毎年お願いしている小学校教育実習意識調査の実習生に対する評価についての自由記述の記述を併せて分析した。小学校教育実習意識調査は小学校教育実習受け入れ先26校に最低1枚ずつお願いした。中には2枚記入していただいた実習校もあり、結果として分析には27枚の小学校教育実習意識調査票を対象とした。

(2) 調査内容

本調査では、実習校においては実習後、実習校から送られてきた実習生の教育実習の成績を判定する成績評価表を用いた。成績評価表は、「基礎的事項」に関する4項目、「子ども理解及び学級経営」に関する4項目、「教科指導と学習評価」に関する10項目、「教科外の指導」に関する2項目の計20項目で構成されている（成績評価表は資料1として付記した）。小学校教育実習意識調査票の「教育実習生として足りないと思われたこと」、「教育実習生として事前に準備（勉強）しておく必要があったと思うこと」、「教育実習生として評価できるといったこと」に対する自由記述の記述を調査内容とした。

(3) 分析方法

成績評価表の各20項目は「極めて良好である」を5、「良好である」を4、「基準は満たしている」を3、「やや不十分である」を2、「不十分である」を1と点数化し、統計処理による分析を行った。分析の方法として、平成28年度の成績評価表と平成27年6月に佐賀市内にて小学校教育実習を行った4年生64名分の成績評価表のデータを比較し分析考察を行った。また、小学校教育実習意識調査の実習生に対する評価についての自由記述の記述は、その記述内容を成績評価表の「基礎的事項」、「子ども理解及び学級経営」、「教科指導と学習評価」、「教科外の指導」の観点より分類し、分析を行った。

3. 結果と考察

(1) 平成27年度と平成28年度の成績評価表の比較分析から

表1は、平成28年度の成績評価の項目及び観点ごとの平均得点を一覧にしたものである。

表1からは各項目の中で、平均評点が4点（5点満点）以下のものが、20項目中13項目あることがわかる。特に、「教科指導と学習評価」の項目は3点台が多く、「作成した学習指導案にしがって、学習評価を実施することができる」、「板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる」の2項目は相対的に低い評価となっている。平成27年度の成績評価におけるは評価観点及び評点合計に関する評点比較を表にしたのが、表2である。

表2からは有意な差はないものの、全ての観点及び評点合計で平成27年度に比べ、平成28年度の評価が低くなっていることが伺える。特に「教科指導と学習評価」及び全体合計得点はお互いt値が-1.23と10%水準での有意なt値にはほぼなっており、有意差がないとは言え、低下していると認識しなくてはいけないと考えられる。また、表3に各項目ごとの平均評点を平成27年度と平成28年度の比較した。

表3から20項目の中で平均評点が上がっている項目は、「子ども理解及び学級経営」の「児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる」と「教科と学習評価」の「課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする」と及び「反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べることができる」の3項目のみであり、その得点の上昇も微々たるものである。

表1 成績評価項目別評点表

○目標達成状況及び得点について	
5. 極めて良好である	4. 良好である
3. 基準は満たしている	2. やや不十分である
1. 不十分である	
○達成目標	実習校平均評点
○基礎的事項	
1 教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	4.39
2 教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	4.12
3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	4.2
4 児童と積極的にかかわろうとすることができる。	4.51
基礎的事項に関する得点(4~20)合計	
17.22	
○子ども理解及び学級経営	
1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	4.14
2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	3.87
3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	3.87
4 学級経営案の理解に基づき、児童を指導しようとするすることができる。	3.8
子ども理解及び学級経営に関する得点(4~20)合計	
15.69	
○教科指導と学習評価	
◆学習指導の事前学習	
1 課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	4.05
2 指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	4.11
◆学習指導の実施	
3 作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	3.81
4 作成した学習指導案にしたがって、学習評価を実施することができる。	3.36
5 板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	3.56
6 児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	3.65
7 学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	3.75
8 必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	3.86
◆学習指導の事後学習	
9 反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるすることができる。	3.81
10 授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書いたりできる。	3.84
教科指導と学習評価に関する得点(10~50)合計	
37.81	
○教科外の指導	
1 教科外活動の目標や内容について理解する。	3.76
2 教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導することができる。	3.78
教科外の指導に関する得点(2~10)合計	
7.55	
評点合計	
秀(90点以上) 優(89~80点) 良(79~70点) 可(69~60点) 不可(60点未満)	78.26

表2 平成27年度と平成28年度評価観点及び評点合計に関する評点比較について

評価観点	平成27年度実習校の 成績評価の評点 ()内は100点換算率	平成28年度実習校の 成績評価の評点 ()内は100点換算率	t 値
基礎的事項 (4項目)	17.58 (88.8%)	17.22 (86.1%)	-1.01
子ども理解及び 学級経営 (4項目)	15.92 (79.6%)	15.69 (78.5%)	-0.75
教科指導と学習 評価 (10項目)	38.75 (77.5%)	37.81 (75.6%)	-1.23
教科外の指導 (2項目)	7.69 (76.9%)	7.55 (75.5%)	-0.81
合計	79.94 (79.94%)	78.26 (78.26%)	-1.23

逆に低下した項目が17項目であり、その中でも有意（5%水準）に低下していると認められる項目が5項目もあった。その項目は、「基礎的事項」の「教育実習の留意事項を全般的に守ることができる」、「子ども理解及び学級経営」の「担任教師が示す学級経営案について理解することができる」、「教科指導と学習評価」の「指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる」、「作成した学習指導案にしたがって、学習評価を実施することができる」、「児童の反応に適切に対応しながら、学習指導をおこなうことができる」の5項目である。低下しているとはいえ、4点台を超えているものや難しい内容のものも含まれるが、「教育実習の留意事項を全般的に守ることができる」及び「指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる」の2項目などはどちらかという意欲や謙虚さといった実習生としてのそもその前提となる項目であると考え、この低下は問題視しなくてはならないといえる。

また、有意差がないものの、0.1点以上低下している項目が4項目ある。つまり9項目が低下していると認識せざるを得ないであろう。なお平成27年度の成績評価がこれまでの過去4回の小学校教育実習の中で特段に評価が高かったわけではなく、平均的な成績評価であったこと¹⁾²⁾³⁾⁴⁾を鑑みると、今一度小学校教育実習の指導のみならず小学校教員免許取得に関わる全ての講義について、本学部全体の問題として考えるべきであろう。図1は、平成27年度平成28年度の小学校教育実習における成績評価の合計評点の分布を表したものである。

図1からは平成27年度に比べ、平成28年度では上

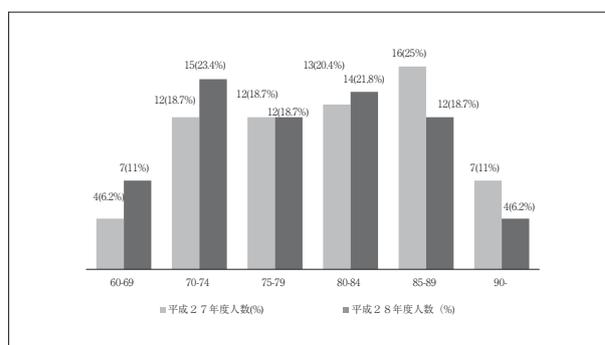


図1 平成27年度と平成28年度の成績評価の合計評点分布

位群（85点以上）の人数が減り、やや下位群（74点以下）及び下位群（60点台）の人数が増えていることがわかる。中位群（75-84点）は、若干増えることもわかる。また、平成27年度の分布が緩やかな右肩上がりの正規分布に近い形に対して、平成28年度の分布がm字型になっていることもわかる。つまり、二極化傾向にあるということが伺える。これは資質・能力の問題なのか、小学校教諭を目指して小学校教育実習に臨む学生と小学校教員免許取得のためだけに実習に臨む学生との意欲の問題なのか、より詳細な分析が必要となるが、どちらにしても小学校教育実習参加の許可の基準の見直しや小学校教育実習指導を含む各指導法の授業の改善といった課題を、学科全体の課題として検討する必要がある。

(2) 小学校教育実習意識調査の自由記述の分析から

成績評価票の数量的データによる分析の結果と考察をより詳細に捉えるために、小学校教育実習意識調査の自由記述を分析する。

表3 平成27年度と平成28年度成績評価項目別評点比較表

○目標達成状況及び得点について			
5. 極めて良好である 4. 良好である 3. 基準は満たしている 2. やや不十分である 1. 不十分である			
○達成目標	実習校平均評点		
○基礎的事項	H27	H28	t 値
1 教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	4.58	4.39	-1.77*
2 教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	4.25	4.12	n.s
3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	4.2	4.2	n.s
4 児童と積極的にかかわろうとすることができる。	4.55	4.51	n.s
基礎的事項に関する得点（4～20）合計	17.58	17.22	n.s
○子ども理解及び学級経営			
1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	4.17	4.14	n.s
2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	3.78	3.87	n.s
3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	4.08	3.87	-2.05*
4 学級経営案の理解に基づき、児童を指導しようとするすることができる。	3.89	3.8	n.s
子ども理解及び学級経営に関する得点（4～20）合計	15.92	15.69	n.s
○教科指導と学習評価			
◆学習指導の事前学習			
1 課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	4.01	4.05	n.s
2 指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	4.31	4.11	-1.79*
◆学習指導の実施			
3 作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	3.89	3.81	n.s
4 作成した学習指導案にしたがって、学習評価を実施することができる。	3.48	3.36	-1.31*
5 板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	3.64	3.56	n.s
6 児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	3.86	3.65	-2.06*
7 学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	3.77	3.75	n.s
8 必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	3.95	3.86	n.s
◆学習指導の事後学習			
9 反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるることができる。	3.78	3.81	n.s
10 授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書いたりできる。	3.97	3.84	n.s
教科指導と学習評価に関する得点（10～50）合計	38.75	37.81	n.s
○教科外の指導			
1 教科外活動の目標や内容について理解する。	3.8	3.76	n.s
2 教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導することができる。	3.89	3.78	n.s
教科外の指導に関する得点（2～10）合計	7.69	7.55	n.s
評点合計			
秀（90点以上） 優（89～80点） 良（79～70点） 可（69～60点） 不可（60点未満）	79.94	78.26	n.s

(n.s 有意差なし, *p<0.1, **p<0.05, ***p<0.01, ****p<0.001)

これまで実習校平均評点の平成27年度と平成28年度を比較したところ、「基礎的事項」、「子ども理解及び学級経営」、「教科指導と学習評価」、「教科外の指導」の4観点とも平成28年度は低くなっていた。

そこで、小学校教育実習意識調査票の「教育実習生として足りないと思われたこと」、「教育実習生として事前に準備（勉強）しておく必要があったと思うこと」、及び「教育実習生として評価できると思ったこと」に対する自由記述を先の4観点ごとに分類し、さらに「肯定・賞賛等」と「意見・要望等」に細分化し、その原因を探り、改善の手がかりを考察することにした。なお、「教科外の指導」の指導については、記述内容が「意見・要望等」の1点しかなかったため、「教科指導と学習評価」の考察に含むこととした。また、考察の際に本文には代表的な記述内容のみ記載している。全ての記述内容を分類したものは資料2として示した。

1) 基礎的事項

1 教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は14記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・実習期間中、教職員に対し、終始礼をもって尽くしていた
- ・教育実習生は、礼儀正しく、まじめで好感がもてた
- ・挨拶や礼儀、言葉遣い等について、きちんと指導がされていたので、基本的なことについて指導する必要がなく、大変助かった

(意見・要望等)

この観点の記述は10記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・緊張はするだろうが、礼節・服装（これはよかった）を事前に身につけておくとさらに素晴らしいと思われる。（社会人としての心構え）
- ・言葉遣い（ヤバイなど、テレビに出る大人の悪さもあるが、気を付けてほしい）
- ・他のクラスの授業参観するとき、事前了承を取りに来るのが遅かった
- ・礼儀作法、社会人として備えるべき言葉遣いが必要である

2 教職に対する使命感や責任感をもって、積極的

に取り組むことができる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は以下の3記述であった。

- ・指示がなくても、すべきことを判断したり、行ったり、自主的に動いた
- ・実習生は事前に校内行事に参加するなど、意欲的に実習校に係わっていた点もよかった
- ・とても意欲があり、礼節をわきまえた行動がとれる学生が増えてきたことをうれしく思う。学校の中で子どもの前に立った時は、一人の大人として、職業人としての先生であるわけで、決して学生ではない。そういった立場を理解したうえで、実習に参加できるよう、指導を続けていただければと思う。我々教師も実習生から、いろいろなことを学ばせていただいている

(意見・要望等)

この観点の記述は14記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・他校の先生と教育実習について話をしたが、その差（やる気や態度など）に驚いた。本校に来た実習生はとても前向きで謙虚であったが、他校では違ったようである
- ・教員をめざすめざす者とそうでない者の意識の差が実習態度・授業にも出ている。自分の将来が教員でなくとも、高い志をもって実習に来てほしい
- ・子どもたちに接するときの教師としての心構えの準備不足である
- ・自ら学ぼうという意欲に欠けていた。社会人としての一般的（常識的）なことを身につけているのか、行動として伝わってこない。

3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は以下の3記述であった。

- ・多くのことを学ぼうという意欲が素晴らしい。また、気づいたことや分からないところを自ら表現し、コミュニケーションをとるとともに、解決の方法を常に見つけようとしていることが伝わってきた。
- ・学ぼうとする意識が、日増しに高まっていった。
- ・わからないことをよく質問していた。

(意見・要望等)

この観点の記述は以下の6記述であった。

- ・わからないことを、「わからないので詳しく教え

てください。」と伝える能力が足りない。

- ・実習に入る前に、どんな教師になりたいのか、実習でどんなことを学びたいか、をしっかりと考えておくことが大切だと思う。
- ・大学の先生が指導されても、最後は学生本人の意識が変わらないと、向上の変容は難しい。
- ・自分で授業前に不安と思うことや疑問点、児童との接し方についての相談など、どんどん尋ねてもらいたい。
- ・自らの動きについて、先輩教師に聞いたり、率先して動いている教師に混じって作業するなどの行動は、ほとんど見受けられなかった。授業づくり等については熱心さも感じられたが、熱い意欲が感じられず、残念だった。
- ・指導教諭からの指導が中心になるのは仕方ないが、もっと他学年の授業も見せてほしい、見たいという積極性がほしい。

4 児童と積極的にかかわろうとすることができる。 (肯定・賞賛等)

この観点の記述は23記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・一か月という期間で、指導案等の専門的な内容について、十分力になれなかったと思うが、子どもたちとのかかわりから感じた難しさや喜びを、これからの大学での勉強に活かしていただけると嬉しい。
- ・笑顔が絶えず、積極的に子どもとかかわろうとしていた。子どもたちに寄り添い、困り感があれば、支援や手立てをとろうと努力していた。
- ・子どもとの向き合い方が素晴らしい。疲れているにもかかわらず、子どもと毎日遊ぶ姿勢はこちらが見習わなければならない姿だった。
- ・意欲的な実習態度で素晴らしかった。特に積極的に子どもたちと係わっていた。この実習をとおして、たくさん成長したと思う。

(意見・要望等)

この観点の記述は以下の1記述であった。

- ・まじめな実習態度であったが、もっと笑顔で、特に子どもの前では朗らかさを前面に出してもよい。

2) 基礎的事項に関する考察

実習校の指摘事項からは、礼儀や真面目さ、児童とのかかわりなどはおおむね評価されている。しかし、児童に対する言葉遣いや元気、積極性、教職員

や子どもたちとのコミュニケーションなどについての評価は高くない。

子ども学部では、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭など、0～12歳までの子どもに係わる専門職の育成を目指している。この数年、60名前後の学生が小学校教育実習を履修しているが、そのうち小学校教員希望は半数に満たない状況である。

そういう実態と、実習校の「教職に対する使命感・責任感をもって、積極的に取り組むことができる」についての指摘事項17点のうち、「意見・要望等」が14点(約82%)と大半を占めていることが、評価に影響していることは明らかであると考えられる。

教育実習は、小学校教員としての自覚と責任をもち、子どもたちや保護者、地域社会の期待と信頼を十分理解・把握し、使命感・熱意をもって行わなければならない。小学校教育実習6年目を終えた今、1年生時から体系的・継続的なカリキュラムの再構築を検討する時期に来ていると考えている。例えば、2年生の9月に実施している学校インターシップは小学校教員への動機づけには有効な取り組みであるが、これを1年生時に実施することで、評価の低い項目の改善・向上につながるのではないかと考える。

3) 子ども理解及び学級経営

1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は14記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・子どもとのコミュニケーションの取り方は評価できる。礼節(挨拶)も同じである。
- ・状況判断力があり、掃除・給食当番などに必要な指導や準備を率先して行っていた。
- ・子どもと積極的に話そうと心掛けるようになっていった。規律を守るような注意もできるようになり、頼もしく感じた。
- ・児童理解に努め、積極的に子どもたちに係わろうとしていた。
- ・子どもとのコミュニケーションを積極的に取り、子どもに寄り添って指導していた。

(意見・要望等)

この観点の記述は以下の2記述であった。

- ・児童との積極的なコミュニケーションが足りない。そのためのコミュニケーションスキルを勉強して

おくこと。

- ・児童理解の姿勢とコミュニケーション力を身につけておくこと。

2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は5記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・学習規律や生活規律で厳しく指導しなければいけない場面でも、適切に指導できる場面が多くみられるようになった。
- ・児童との信頼関係を築き、悪いことをしっかり注意できるようになった。
- ・指導者として子どもとの距離間（指導すべき点は、毅然とした態度で接することなど）、しかし、短い実習期間内でそれは難しいことでもある。期間の最後では、きちんと指導しようとする態度がみられるようになった。

(意見・要望等)

この観点の記述は5記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・休み時間の教師という立場からの児童への対応が十分でない。
- ・実習生としては難しいと思うが、子どもたちにとってはやはり教師として接してほしいので、距離感（適度な）は必要かと思う。
- ・生徒指導面でのTPOに応じた適切な指導（特に非は非であるとする厳しさ）が足りない

3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は以下の1記述であった。

- ・担任の思いや願いを理解し、子どもたちを育てるという目標に向かってよいサポートをしてくれた。今回の教育実習でさらに教師になりたいという思いが強くなったように思う。

(意見・要望等)

この観点の記述は以下の1記述であった。

- ・子ども理解及び学級経営（学級経営案と児童理解の関連性について）ができていない。

4 学級経営案の理解の基づき児童を指導しようとするすることができる。

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は以下の1記述であった。

- ・子どもたちと積極的にかかわろうとする態度、指導・助言を真摯に受け止める心構えが感じられた。「何事にも誠実に取り組む」という重要なポイントにつながると思われる。

(意見・要望等)

なし

4) 子ども理解と学級経営に関する考察

「子ども理解及び学級経営」は、「3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる」についての実習校平均評点の平成27年度と28年度の差が大きく、あとの「1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる」、「2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる」、「4 学級経営案の理解に基づき児童を指導しようすることができる」については、ほぼ同じ平均評点である。

学級経営案については、その指摘事項は「肯定・賞賛等」、「意見・要望等」とも1点ずつと少ないものの、学級担任にとっては、「児童一人一人の成長の場づくり」という観点からは欠かせないものである。

そのため、日ごろから児童と積極的にコミュニケーションを行ったり、休み時間に一緒に遊んだり、掃除などの活動に係わったりしながら、児童一人一人の実態や状況を把握し、児童の個性・能力や可能性などを引き出し、伸ばしていかなければいけないと考える。

そのことを本学の小学校教育実習指導の中で、どう指導していたかを検証・改善していかなければいけないが、「1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる」、「2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる」の評価は低くないので、学級経営とその計画案の理論や考え方等を確実に指導していけば、「子ども理解及び学級経営」の全体評価が高まると思われる。

5) 教科指導と学習評価

◆ 学習指導の事前指導

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は11記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・授業に対する教材研究全般、指導案の作成は頑

張っていた。

- ・教材研究を熱心にされ、おそくまで自分の授業の準備に取り組んで努力していた。
- ・担当の指導の先生方と、遅くまで教材研究をされていた。子どもたちがわかりやすい指導をするためには、授業の中で様々な工夫が仕込まれていることを学んだと思う。
- ・一週目は自分で考え、授業を創ることが難しかったが、二週目からは見違えるほどに成長した
(意見・要望等)

この観点の記述は43記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・授業の組み立て方や見方が十分でない。指導案の書き方、評価の仕方についてももっと勉強しておく。
- ・PDCA サイクルを意識した授業の組み立てや指導案及び細案等の作成能力が足りない。
- ・指導案の書き方や学習評価の仕方、机間指導のあり方などを勉強しておく。
- ・指導案の書き方のスタート時点でのベースが低い。
- ・指導案作成の練習・経験が足りない。指導案の書き方を実習中に学ぶのではなく、事前に数回以上書く経験をしてほしい。
- ・指導案の文章表現や学習中の児童への言葉遣い、全体的な授業計画、教材研究について、足りない点がある。
- ・教材研究力、指導案を書く力、挨拶が不十分である。
- ・学習指導要領、指導書の読み込みをお願いしたい。
- ・指導案を何回も作成してほしい。模擬授業も何度も行ってほしい。
- ・指導案構想力(単元のねらい、位置づけ、児童の実態を踏まえた指導観の表現)の指導ができていない。

◆ 学習指導の実施

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は10記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・授業に対して真剣に取り組む、模擬授業をとおして、改善すべきところを見つけて、指導案を作成し直し、授業に臨むことができた。
- ・授業についても、発問や板書、楽しい授業をするために工夫を一生懸命考えて取り組んでいたと思う。

・輪中の模型を使い、視覚的に理解しやすくしたところは良かった。

- ・授業に見通しがもてるようになり、発問等が適切になった。指導案が綿密な教材研究に裏打ちされた素晴らしいものになった。何事にも十分な準備が必要だということを体得できた。
- ・さまざまな学年・教科の授業を見て、授業の組み立て方、発問の仕方など、丁寧に観察していた。
- ・板書の文字の大小や濃淡を調整して、丁寧に見やすい文字を書き記すことができた。

(意見・要望等)

この観点の記述は22記述であった。代表的な記述を以下に示す。

- ・授業の構成力が今一つである。
- ・誤字、脱字、模擬授業をとおしての板書を勉強しておく。
- ・板書の練習(字の大きさやバランス)しておく。
- ・担当学年までに出てくる漢字の筆順、教材研究の方法・準備物等の勉強しておく。
- ・授業の話術が十分でない。授業での指示や発問を出す時の基本的なルールをもっと身につけておく。

◆ 学習指導の事後指導

(肯定・賞賛等)

この観点の記述は以下の5記述であった。

- ・実習ノートの記録が向上した。
- ・授業を参観して、多く観点から学ぶという姿勢が素晴らしい。
- ・授業については、経験を重ねるごとに落ち着き、全体を見ての指導も可能になった。それに伴い、個別の指導についても担任の指導からの気づきをノートに記すことできた。
- ・実習授業後の指導を次回に活かそうとしているところは評価できる。
- ・学習指導ではよかった点、反省点など、具体的に振り返り、授業に活かしていた。

(意見・要望等)

なし

教科外の指導

(肯定・賞賛等)

なし

(意見・要望等)

- ・指導案の書き方や、道徳、生活科とはそもそも何か、の勉強をしていく。

6) 教科指導と学習評価に関する考察

実習校からの各項目の指摘事項については、「学習指導の事前指導」では「肯定・賞賛等」11点、「意見・要望等」42点、「学習指導の実施」では「肯定・賞賛等」10点、「意見・要望等」22点、「学習指導の事後指導」では「肯定・賞賛等」5点、「意見・要望等」0点、「教科外の指導」では「肯定・賞賛等」0点、「意見・要望等」1点であった。

この結果から、特に「学習指導要領の理解・把握」、「教材研究の取り組み・方法」、「学習指導案の作成」、「学習指導の実施」について、課題があるとされる。「学習指導要領」についての読み込みができていないために、学習指導要領の各教科等の目標・内容等の理解・把握ができていない。このことは、教育課程や年間指導計画を踏まえたうえでの「学習指導案の作成」を見落とすことにも関連していると考えられる。

次に「学習指導案の作成」にあたっては、各教科等の目標や内容等を踏まえ、児童の学ぶ姿の具体的なイメージが描けず、「教材研究」が不足していることが、初めの「単元のねらい、教材の価値観や教育的な意義」、そのあとの指導観、指導目標、授業展開、評価基準等の不十分な考察・記述につながっていると思われる。また、児童が生き生きと学習に取り組むための発問計画、構造的・効果的な板書、明確な説明・指示などにも同じことが言え、「学習指導の実施」での指摘事項につながっていると考えられる。

「学校インターンシップ」での授業参観で「よい授業」を学び、「教科等指導法」、「教科演習」、「小学校教育実習指導」等を通して理論と実践力を身につけるような指導体制構築を再検討する時期ではないかと考えられる。

4. おわりに

各実習校からの意識調査の中に、本学に対する「肯定・賞賛等」9点、「意見・要望等」44点があった。この記述内容から本学の小学校教育実習指導のあり方全般について考察した結果から、以下の4点を今後の課題としてあげる。なお「肯定・賞賛等」9点、「意見・要望等」44点の記述については資料として付記する。

○「肯定・賞賛等」の代表的な記述を以下に示す。
・実習生の実習に対するたいへん真面目な態度に感

心した。大学での指導がきちんと行き届いていると感じた。

- ・二人の実習生はこの四週間、本当に一生懸命に頑張った。朝早く登校し、帰りもずいぶん遅くまで教材研究等に努力された。教師としての心構えや仕事内容、また、子どもと接する楽しさなど様々な経験を積まれた。この貴重な経験を生かして、ぜひ教師の道を歩んでほしいものである。
- ・研究授業を始め、大学の指導の先生に何度も足を運んでいただき、ありがとうございました。
- 「意見・要望等」の代表的な記述を以下に示す。
- ・どの実習生もまじめに取り組む姿が見られるが、学校現場の負担も大きいものがある。少なくとも「今年度、〇〇県・〇〇市の採用試験を受けます。」という強い意思をもった学生を出してほしい。
- ・実習生の評価・評定については、内容が細かすぎると思う。もっと簡単な評価でないと、現場では対応が非常に難しくなっている。ただでさえ、実習を受け入れる学級担任が少なくなっているのが、本校の現状である。子どもたちの通知表をつけるような評価・評定をする意味を教えてくださいと思う。大学側の知りたいことがどこにあるのか。
- ・担当教員も本気になって指導している。加えて、校長、教頭、主幹、教務も必死で指導している。それは、ぜひ佐賀県の小学校教員になってほしいという思いからである。取得免許希望を事前調査して、幼保園や小学校の振り分けをしていただけたら助かる。
- ・指導されていると思うが、学生どうして模擬授業をするなどの活動・演習の経験があればと思う。

1) 教育実践力育成に向けたカリキュラムベースの改善

教材研究や学習指導案作成等の授業づくりに関する実践力育成については、今後の小学校教育実習指導や、各教科指導法の指導内容などを、学科全体のカリキュラムを検討していく中で改善していくことが必要である。今年度の大学3年生の小学校教育実習指導より、これまでの反省から模擬授業時間を倍に増やし、学生が一人で45分の授業を行う回数を増やしているが、単独の講義の中だけでなく、大学1年生時から体系的・継続的なカリキュラムの再構築を検討する時期に来ているのではないだろうか。「学

校インターンシップ」での授業参観で「よい授業」を学び、「教科等指導法」、「教科演習」、「小学校教育実習指導」等を通して理論と実践力を身につけるような指導体制構築を再検討する時期ではないかと考えられる。例えば、2年生の9月に実施している学校インターンシップは小学校教員への動機づけには有効な取り組みであるが、これを大学1年生時に実施することで、評価の低い項目の改善・向上につながるのではないかと考えられる。

2) 教職への意識・意欲について

本学の小学校教育実習を履修する学生のうち、小学校教員希望は半数に満たず、保育士、幼稚園教諭、施設職員等希望が多いというのが実態である。従前から「小1プロブレム」が課題となっているが、その未然・予防に向けては、保幼小の円滑な連携・移行が不可欠である。子ども学科においては、「0～12歳までの子どもに係わる専門職」を目指している。将来、保育園・幼稚園・小学校、また、施設等のいずれにおいても、その資格・免許取得にむけての実習が、「小1プロブレム」の未然・予防をはじめ、子どもたちの指導・支援に効果・成果があると考えられる。そこで、その保育園・幼稚園・小学校での実習が、相互に密接に関連し、「三位一体」となるようなカリキュラムを検討しなくてはならないのかと考える。

3) 保育士・教員養成の支援体制について

保育士・教員希望の学生自身が理想とする保育士・教員像の実現に向け、どのような科目等履修を行ったらいいか、また、実習や採用試験に向け、どのような対策をとればよいか、相談、指導・助言等のセンター的機能を果たす常設部署（保育・教職実践センター）の設置が必要であると考えられる。このことは、将来保育士・教員をめざす高校生にとって、大学選択の一因になるのではないかと考えている。

4) 佐賀市教育委員会の連携・協力について

本学の小学校教育実習については、本学と佐賀市教育委員会との教育実習に関する協定（平成23年1月26日締結）のもと、佐賀市立小学校において実施している。

実習校では校長先生・指導教員をはじめ関係教職員の方々が、次世代の教員養成に誠心誠意、尽力していただいている。しかしながら、年齢やキャリア・

分掌事務の軽重などにおける教員構成を考慮すると、指導教員の確保が難しいという状況が生じているとの声がある。

人事異動・人事配置は、学校・教育委員会にとって、極めて大きな課題である。本学としては佐賀市教育委員会との「小学校教育実習協議会」や両担当者間の情報交換等において、「教育実習指導が、教員の指導力や資質の向上、学校の活性化などにつながることを期待している」旨を伝え、前述のような状況が生じないことを願うばかりである。

本研究は、継続的に行うことにより、意味のある研究になると考えられる。次年度以降においても、教育実習後の評価を分析する事で、実習校が求める小学校教育実習生としての力量を、小学校教育実習指導の中で育成するような小学校教育実習指導の指導内容を検討する事が可能になると考えられる。

また、今年度の大学3年生の小学校教育実習指導より、これまでの反省から模擬授業時間を倍に増やし、学生が一人で45分の授業を行う回数を増やしている。こうした変更の成果も継続的なデータの収集により確認できるであろう。そのためにも、継続的に基礎的なデータを蓄積すること、分析されたデータと小学校教育実習指導の指導内容の成果と課題を、より詳細に考察ができる調査内容を検討することが、今後の課題であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 松本大輔・佐藤範男・二宮貴之・大城あゆみ (2013)「本学小学校教育実習に関する成果と課題についての一考察～実習生と実習校の意識調査からの考察～」西九州大学子ども学部紀要第4号, pp. 35-43.
- 2) 松本大輔・川上貴・佐藤範男・松井克行 (2014)「小学校教育実習に関する実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の相違に関する検討」西九州大学子ども学部紀要第5号, pp. 71-78.
- 3) 松本大輔・川上貴・佐藤範男・松井克行 (2015)「小学校教育実習に関する実習校の成績評価と実習生の自己成績評価の相違に関する検討(2)」西九州大学子ども学部紀要第6号, pp. 105-110.
- 4) 松本大輔・川上貴・佐藤範男・松井克行 (2016)「小学校教育実習に関する実習校の成績評価と

実習生の自己成績評価の相違に関する検討
(2)」西九州大学子ども学部紀要第7号, pp.
49-56.

資料1 成績評価表

○目標達成状況及び得点について		
以下に記す目標達成の状況に応じて、5～1のいずれかに○を付す。その後、各項目の得点を合計し、「合計」欄に合計点を記入する。 ・5点（極めて良好）・4点（良好） ・3点（基準は満たしている）・2点（やや不十分）・1点（不十分）		
○基礎的事項		達成状況
1 教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。	5・4・3・2・1	
2 教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。	5・4・3・2・1	
3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。	5・4・3・2・1	
4 児童と積極的にかかわることができる。	5・4・3・2・1	
基礎的事項に関する得点（4～20）	合計	点
○子ども理解及び学級経営		
1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。	5・4・3・2・1	
2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。	5・4・3・2・1	
3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。	5・4・3・2・1	
4 学級経営案の理解に基づき、児童を指導することができる。	5・4・3・2・1	
子ども理解及び学級経営に関する得点（4～20）	合計	点
○教科指導		達成状況
◆学習指導の事前学習		
1 課題に応じて、学習指導案を積極的に作成しようとする。	5・4・3・2・1	
2 指導を受け入れ、学習指導案の改善を図ることができる。	5・4・3・2・1	
◆学習指導の実施		
3 作成した学習指導案にしたがって、授業を展開することができる。	5・4・3・2・1	
4 作成した学習指導案の評価項目にしたがって、学習評価に取りくむことができる。	5・4・3・2・1	
5 板書や発言、ノートの指導、あるいは実技指導を適切に行うことができる。	5・4・3・2・1	
6 児童の反応に適切に対応しながら、学習指導を行うことができる。	5・4・3・2・1	
7 学級経営を意識して、具体的な学習指導を行おうとすることができる。	5・4・3・2・1	
8 必要に応じて、授業記録等を適切に作成することができる。	5・4・3・2・1	
◆学習指導の事後学習		
9 反省的考察の協議会等に参加し、積極的に意見を述べるすることができる。	5・4・3・2・1	
10 授業を振り返り、改善点について述べたり、レポートを書くことができる。	5・4・3・2・1	
教科指導と学習評価に関する得点（10～50）	合計	点
○教科外の指導		
1 教科外活動の目標や内容について理解する。	5・4・3・2・1	
2 教科外活動のいずれかにおいて学習指導案を作成し指導をすることができる。	5・4・3・2・1	
教科外の指導に関する得点（2～10）	合計	点

資料2 意識調査における自由記述の内容の観点別分析表

基礎的事項	
1	教育実習の留意事項を全般的に守ることができる。
	(肯定・賞賛等)
	<ul style="list-style-type: none"> ・実習期間中、教職員に対し、終始礼をもって尽くしていた。 ・教育実習生は、礼儀正しく、まじめで好感がもてた。 ・一生懸命に実習に取り組み、礼儀正しかった。 ・一生懸命に取り組むことができた実習生だった。自分自身を見直す上でも、いい経験だった。 ・職場でのマナーや挨拶が素晴らしく、感心した。しっかりとした志も持っていると思う。教職だけでなく、社会人としての資質も育てられているのだなあと、感心した。 ・挨拶や礼儀、言葉遣い等について、きちんと指導がされていたので、基本的なことについて指導する必要がなく、大変助かった。 ・服装も礼儀も学校勤務にふさわしく立派だった。 ・提出物をきちんと出していた。 ・挨拶や熱意をもって教育実習に取り組むことは良かった。 ・全体的に挨拶や礼儀は基本的にきちんとできていた。明るく元気に過ごしていたし、頑張っていた ・意欲、待遇等は大学生なのにしっかりと身につけていて驚いた。今どきの子は偉いと感じた。 ・とても礼儀正しく、朝・帰りの挨拶など、しっかりできていた。毎朝、玄関・職員室前の廊下などに掃除機をかけており、助かった。 ・毎日遅刻することなく、早めに出勤できた。 ・出勤、退勤の際は、必ず職員に丁寧に挨拶していた。
	(意見・要望等)
	<ul style="list-style-type: none"> ・声の大きさ、元気のよさが足りない。 ・学校内ではよいが、朝、地域の方への挨拶などが不十分である。子どもに対応するときも同じく、はつらつと元気に笑顔で接するとさらに良い。 ・緊張はするだろうが、礼節・服装（これはよかった）を事前に身につけておくとさらに素晴らしいと思われる。（社会人としての心構え） ・指導者として子どもに接すること、社会人として職場にいることなど、少しずつ身についたと思う。（児童と一緒に指導する面があった。） ・言葉遣い（ヤバイなど、テレビに出る大人の悪さもあるが、気を付けてほしい） ・給食費を期日より遅れて納入するなど、社会人としての自覚がまだ足りない。 ・他のクラスの授業参観するとき、事前了承を取りに来るのが遅かった。 ・礼儀作法、社会人として備えるべき言葉遣いが必要である。 ・礼儀正しさ、言葉遣いが不十分である。 ・実習校の職員や周囲の方々への接し方の事前指導が必要。
2	教職に対する使命感や責任感をもって、積極的に取り組むことができる。
	(肯定・賞賛等)
	<ul style="list-style-type: none"> ・指示がなくても、すべきことを判断したり、行ったり、自主的に動いた。 ・実習生は事前に校内行事に参加するなど、意欲的に実習校に係わっていた点もよかった。 ・とても意欲があり、礼節をわきまえた行動がとれる学生が増えてきたことをうれしく思う。学校の中で子どもの前に立った時は、一人の大人として、職業人としての先生であるわけで、決して学生ではない。そういった立場を理解したうえで、実習に参加できるよう、指導を続けていただければと思う。我々教師も実習生から、いろいろなことを学ばせていただいている。
	(意見・要望等)

- ・他校の先生と教育実習について話をしたが、その差（やる気や態度など）に驚いた。本校に来た実習生はとても前向きで謙虚であったが、他校では違ったようである。
- ・教員をめざすめざす者とそうでない者の意識の差が実習態度・授業にも出ている。自分の将来が教員でなくとも、高い志をもって実習に来てほしい。
- ・積極性、熱意（外に見える・出せる）を、教育実習という場だからこそ、もう少しアピールしてもよかったと思う。
- ・子どもたちに接するときの教師としての心構えの準備不足である。
- ・小学校の教師を目指している学生とそうでない学生とでは、意欲・意識の違いがみられるところもあった。学生なので、礼儀を知らない部分もあるかと考えるが、現場の小学校で実習するのだから、全身全霊で実習してほしい学生もいた。
- ・教師にならなくても単位を取るだけでも、一生懸命さを見せてほしい学生もいた。
- ・「教育実習の記録」の書き方・使い方が理解できていないうちに、教育実習が始まったのでは、と思った。
- ・希望する進路が小学校ではないということもあり、「絶対に小学校の教員になりたい」という強い意志は感じなかった。
- ・小学校の先生に絶対になりたいという熱意を感じなかった。
- ・時間外のことについて、こちらからはないも指示をしなかったが、本校職員が全員で取り組んでいる職員作業や学級事務は、教職の現場を知る貴重な機会として自ら参加してほしい。
- ・従順で規律正しく、大変真面目だが、若さゆえのガッツややる気をもっとあってもよいと思う。これからの教員には何より「たくましさ」が必要だと思う。
- ・自ら学ぼうという意欲に欠けていた。社会人としての一般的（常識的）なことを身につけているのか、行動として伝わってこない。
- ・授業づくりの前に、将来の子どもたちにとって模範を示しながら行動しようとする意識（「国民全体の奉仕者」、「守秘義務」等の意識）
- ・授業に向かう心構えをもっと勉強しておくこと。

3 実習校教員と適切にコミュニケーションを取り、他の実習生と協力できる。

（肯定・賞賛等）

- ・多くのことを学ぼうという意欲が素晴らしい。また、気づいたことや分からないところを自ら表現し、コミュニケーションをとるとともに、解決の方法を常に見つけようとしていることが伝わってきた。
- ・学ぼうとする意識が、日増しに高まっていった。
- ・わからないことをよく質問していた。

（意見・要望等）

- ・わからないことを、「わからないので詳しく教えてください。」と伝える能力が足りない。
- ・実習に入る前に、どんな教師になりたいのか、実習でどんなことを学びたいか、をしっかりと考えておくことが大切だと思う。
- ・大学の先生が指導されても、最後は学生本人の意識が変わらないと、向上的変容は難しい。
- ・自分で授業前に不安と思うことや疑問点、児童との接し方についての相談など、どんどん尋ねてもらいたい。
- ・自らの動きについて、先輩教師に聞いたり、率先して動いている教師に混じって作業するなどの行動は、ほとんど見受けられなかった。授業づくり等については熱心さも感じられたが、熱い意欲が感じられず、残念だった。
- ・指導教諭からの指導が中心になるのは仕方ないが、もっと他学年の授業も見せてほしい、見たいという積極性がほしい。

4 児童と積極的にかかわろうとすることができる。

（肯定・賞賛等）

- ・一か月という期間で、指導案等の専門的な内容について、十分力になれなかったと思うが、子どもたちのかかわりから感じた難しさや喜びを、これからの大学での勉強に活かしていただけると嬉しい。

- ・笑顔が絶えず、積極的に子どもとかかわろうとしていた。子どもたちに寄り添い、困り感があれば、支援や手立てをとろうと努力していた。
- ・子どもとうまく関係を築けるのか心配したが、意外にボランティアやアルバイトで学校や地域へのかかわりをもっていたので、子どもとの距離を縮めるために役立っていた。
- ・土曜開校、集会活動への参加、金管クラブの指導など、進んで子どもに向き合おうとする姿勢に好感が持てた。怪我をした子どもへの対応が迅速で助かった。
- ・学級の児童全員と係わることができたことは評価できる。
- ・子どもとかかわり方が、上手になってきた。
- ・明るく元気に子どもに接していた。
- ・子どもに積極的にかかわろうとする姿は評価できる。
- ・児童と積極的にコミュニケーションをとり、昼休みも一緒に遊び、かかわりをもっていった。
- ・児童に積極的にかかわり、短い実習期間だったが、しっかりと関係を築いていた。
- ・場に応じて児童に声かけをしたり、プリント配布したり、丸付けしたりと、積極的に行動していた。
- ・子どもと積極的にかかわり、休み時間も一緒に遊んだ。
- ・児童に積極的にかかわっていた。
- ・始業の際、朝、校門に立って全校児童に元気よく挨拶をし、児童とのふれあいを深めていた。
- ・子どもとの向き合い方が素晴らしい。疲れているにもかかわらず、子どもと毎日遊ぶ姿勢はこちらが見習わなければならない姿だった。
- ・子どもたちと一緒に活動し、子どもたちのいい面をたくさん感じたと思う。
- ・清掃活動への積極的な取り組み
- ・四週間という長い間、一緒に過ごし、遊んでくれたことは、子どもたちにとって素敵な思い出となっている。
- ・子どもたちとの係わり方（一人一人にメッセージを書いていた。内容がそれぞれに合うものだった。）は、頑張っていた。
- ・実習生と一緒に過ごした時間は、子どもたちにとって宝物になった。
- ・子どもたちへの声掛けや積極的なかかわりなどは頑張っていた。
- ・意欲的な実習態度で素晴らしかった。特に積極的に子どもたちと係わっていた。この実習をとおして、たくさん成長したと思う。
- ・学習面での支援、準備や片付けなど生活面での支援の必要な児童には、自発的に寄り添ってサポートすることができていた。

(意見・要望等)

- ・まじめな実習態度であったが、もっと笑顔で、特に子どもの前では朗らかさを前面に出してもよい。

子ども理解及び学級経営

1 児童の発達段階に応じて、コミュニケーションや対応ができる。

(肯定・賞賛等)

- ・子どもとのコミュニケーションを図ることを、様々な面から行っていた。(まずは笑顔)
- ・子どもとのコミュニケーションの取り方は評価できる。礼節(挨拶)も同じである。
- ・児童への話し言葉が不十分、児童へのかかわり方・対応は評価できる
- ・とても前向きで子どもと進んで関わろうとする姿に熱意を感じた。
- ・積極的に児童に接触し、コミュニケーションを図っていた。
- ・状況判断力があり、掃除・給食当番などに必要な指導や準備を率先して行っていた。
- ・休み時間には、児童と遊んだり、おしゃべりをしたりして、コミュニケーションを図っていた。
- ・子どもたちとのコミュニケーション能力や、配慮を要する子どもへの対応が向上した。
- ・児童とのコミュニケーションが日に日に図れるようになり、進んで声掛けができるようになった。
- ・子どもと積極的に話そうと心掛けるようになっていった。規律を守るような注意もできるようになり、頼もしく感じた。

<ul style="list-style-type: none"> ・児童理解に努め、積極的に子どもたちに係わろうとしていた。 ・子どもとのコミュニケーションを積極的に取り、子どもに寄り添って指導していた。
(意見・要望等)
<ul style="list-style-type: none"> ・児童との積極的なコミュニケーションが足りない。そのためのコミュニケーションスキルを勉強しておくこと。 ・児童理解のための姿勢とコミュニケーション力を身につけておくこと。
2 児童に公平に接し、児童を褒めること、叱ることができる。
(肯定・賞賛等)
<ul style="list-style-type: none"> ・学習規律や生活規律で厳しく指導しなければいけない場面でも、適切に指導できる場面が多くみられるようになった。 ・はじめはかかわり方が「お客さん」という感じだったが、声掛けをすると注意をするようになったし、できる事は手伝おうとする姿勢が感じられた。 ・児童との信頼関係を築き、悪いことをしっかり注意できるようになった。 ・指導者として子どもとの距離間（指導すべき点は、毅然とした態度で接することなど）、しかし、短い実習期間内でそれは難しいことでもある。期間の最後では、きちんと指導しようとする態度がみられるようになった。 ・児童一人一人の持っているよさを見極め、児童の実態を踏まえての指導・支援ができた。
(意見・要望等)
<ul style="list-style-type: none"> ・休み時間の教師という立場からの児童への対応が十分でない。 ・実習生としては難しいと思うが、子どもたちにとってはやはり教師として接してほしいので、距離感（適度な）は必要かと思う。 ・遊び相手で終わらず、必要なことを厳しく指導すること。 ・自信をもって、児童の前に立てなかった。 ・生徒指導面での TPO に応じた適切な指導（特に非は非であるとする厳しさ）が足りない。
3 担任教師が示す学級経営案について理解することができる。
(肯定・賞賛等)
<ul style="list-style-type: none"> ・担任の思いや願いを理解し、子どもたちを育てるという目標に向かってよいサポートをしてくれた。今回の教育実習でさらに教師になりたいという思いが強くなったように思う。
(意見・要望等)
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども理解及び学級経営（学級経営案と児童理解の関連性について）ができていない。
4 学級経営案の理解のに基づき、児童を指導しようすることができる。
(肯定・賞賛等)
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちと積極的にかかわろうとする態度、指導・助言を真摯に受け止める心構えが感じられた。「何事にも誠実に取り組む」という重要なポイントにつながると思われる。
(意見・要望等)
なし
教科指導と学習評価
◆ 学習指導の事前指導
(肯定・賞賛等)
<ul style="list-style-type: none"> ・授業に対する教材研究全般、指導案の作成は頑張っていた。 ・教材研究を熱心にされ、おそくまで自分の授業の準備に取り組んで努力していた。 ・担当の指導の先生方と、遅くまで教材研究をされていた。子どもたちがわかりやすい指導をするためには、授業の中で様々な工夫が仕込まれていることを学んだと思う。 ・指導案の書き方の向上、子どもを見ながらの授業展開、興味を持たせるような導入の工夫がみられた。 ・授業設計、評価についての考え方が向上した。

- ・教育実習日誌の記入、指導案の作成は頑張っていた。
- ・指導内容の教材研究はよくなっていった。
- ・指導を素直に受け入れ、改善しようという姿勢がみられた。
- ・指導教諭の指導を素直に聞いて、教材研究に励んだ。
- ・実習校教員と積極的にかかわり、教科の特性や指導法について学習し、研修を深めていた。
- ・一週目は自分で考え、授業を創ることが難しかったが、二週目からは見違えるほどに成長した

(意見・要望等)

- ・それぞれの教科・領域での指導案や授業の作り方について、事前指導してあったと思うが、それぞれの特性に触れてあるとなおいいと思う。
- ・文章記述の正確さ（誤記、漢字・アルファベットの正しい筆順、主語と述語の不一致）
- ・授業の組み立て方や見方が十分でない。指導案の書き方、評価の仕方についてももっと勉強しておく。
- ・PDCA サイクルを意識した授業の組み立てや指導案及び細案等の作成能力が足りない。
- ・指導案の書き方や学習評価の仕方、机間指導のあり方などを勉強しておく。
- ・学習指導案の作成や指導案に基づく模擬授業をもっと勉強しておく。ICT 機器（電子黒板）の利活用も同じである。
- ・教材研究、指導案の書き方
- ・もっと教材研究をしてほしい。
- ・指導案の書き方のスタート時点でのベースが低い。
- ・導入（もっとたくさんのパターンの例示など）、めあてと評価についての指導をしておく。
- ・最も長い時間をかけて指導する国語や算数指導への意識を高くもってほしかった。
- ・実習校が使用している教科書の内容をもっと勉強しておく。
- ・実習前に大学で指導案作成の練習ができないだろうか。
- ・教科の1単元を任せるとはしないので、指導教員が行っている指導法に準じて指導案を作成してもらっている。それでよいだろうか。
- ・教材研究の方法等については、習得が不十分だと思ったが、実際に現場で子どもの実態見ないと難しいと思う。実習で積極的に学んでもらえたら幸いである。
- ・指導案の作成について、小学校で実際に使用したものを見る機会があれば、授業の流れを意識して作成しやすいと思う。
- ・系統性を踏まえた教材研究・児童の実態の把握・板書・電子黒板の操作の仕方
- ・指導案作成の練習・経験が足りない。指導案の書き方を実習中に学ぶのではなく、事前に数回以上書く経験をしてほしい。
- ・指導案の文章表現や学習中の児童への言葉遣い、全体的な授業計画、教材研究について、足りない点がある。
- ・学習指導要領を読むこと、指導案の書き方、子ども理解の勉強をしておく。
- ・指導案の作成、字の書き順などの基本的なことを身につけておく。
- ・指導案の作成の経験を積むこと（学習の流れがもう少しわかるように）。
- ・研究授業に係わる指導案の書き方、授業の展開の仕方などの勉強をする。
- ・担当する学年の教科や単元についての教材研究、指導案の書き方の勉強が足りない。
- ・指導案について、もう少し知識があったらと思う。
- ・指導案の書き方や形式（旧態依然の形式で評価の方法が詳しくなかったり）で、説明が必要であった。
- ・どの学年で、どの教科があるのか認識しておらず、基本的な教育課程は学習してほしい。
- ・指導案について、大学で何度か書く経験があればと思う。
- ・大学で指導案の立て方、指導の手立てなどの勉強をしておれば、実習でより成長すると思う。
- ・水泳の時期なので、ある程度水泳指導の知識があればと思う。
- ・各教科の特性とねらいについての理解が足りない。（学習指導要領）
- ・指導案作成の技術、効果的な板書技術と ICT 利活用能力の勉強をしておく。

- ・一時間の授業の流れを表すべき「板書計画〔電子黒板との併用も含む〕」をしっかりと作成することをおおして、内容構成等が具体的な授業を想定・実践する。児童がノートを取りやすく、板書を見ただけで本時の学習の要点がわかるような丁寧な板書づくりが必要である。
- ・指導案の書き方をもう少し事前に学習しておくとお実りある実習になると思う。
- ・教材研究力、指導案を書く力、挨拶が不十分である。
- ・学習指導要領、指導書の読み込みをお願いしたい。
- ・指導案を何回も作成してほしい。模擬授業も何度も行ってほしい。
- ・学習指導案の基本的な書き方の指導が必要。
- ・授業にむけた計画的な準備ができていない。
- ・指導案作成の練習、教科書を読んでの学習内容の把握などができていない。
- ・指導案の書き方にとっても時間を取られた。事前に基本的なことだけでも指導をお願いする。
- ・指導案構想力（単元のねらい、位置づけ、児童の実態を踏まえた指導観の表現）の指導ができていない。
- ・指導教員の話をも素直に受け止め、授業づくりを進めることはできていたが、一つの授業を構想するための努力（十分な教材研究やよい意味でのこだわりなど）がまだまだ足りない。

◆ 学習指導の実施

（肯定・賞賛等）

- ・授業に対して真剣に取り組み、模擬授業をとおして、改善すべきところを見つけて、指導案を作成し直し、授業に臨むことができた。
- ・授業についても、発問や板書、楽しい授業をするために工夫を一生懸命考えて取り組んでいたと思う。
- ・輪中の模型を使い、視覚的に理解しやすくしたところは良かった。
- ・授業に見通しがもてるようになり、発問等が適切になった。指導案が綿密な教材研究に裏打ちされた素晴らしいものになった。何事にも十分な準備が必要だということを体得できた。
- ・授業を行うことに慣れて、目当てとまとめを意識して授業を行っていた。
- ・個々人の実態を把握し、指名などを意図的に行うことができるようになった。
- ・児童の顔と名前をいち早く覚え、5回の授業を行うときにも、座席表を見ず指名することができた。
- ・さまざまな学年・教科の授業を見て、授業の組み立て方、発問の仕方など、丁寧に観察していた。
- ・板書の文字の大小や濃淡を調整して、丁寧で見やすい文字を書き記すことができた。
- ・児童への発問・発言を明瞭な声で発することができるようになり、児童の理解力向上につながった。

（意見・要望等）

- ・授業の構成力が今一つである。
- ・字を丁寧に書く。（板書、ノートなど）
- ・誤字・脱字、模擬授業をとおしての板書を勉強しておく。
- ・指導案をもとにした模擬授業をする。
- ・板書の練習（字の大きさやバランス）しておく。
- ・担当学年までに出てくる漢字の筆順、教材研究の方法・準備物等の勉強しておく。
- ・授業の話術が十分でない。授業での指示や発問を出す時の基本的なルールをもっと身につけておく。
- ・一か月の実習期間の中で、一度ぐらいは水泳のときにプールに入って指導をしてほしかった（体調面のこともあるが）。子どもたちも毎時間それを願っていた。
- ・書写力の向上（特に筆順など）
- ・一年生にひらがなの指導を行うことを考え、正しい筆順の確認をしてほしかった。（板書で間違いがあった）
- ・漢字やひらがな・カタカナの筆順の確認
- ・授業における児童の『考える時間』の確保に努めるとともに、見出した考えを児童の言葉で的確に表現させる。児童の発言やつぶやきを大切に、児童の思考に幅をもたせる。机間指導の中で児童一人一人への肯定的な声掛けに努め、やる気と意欲を育てることが足りない。
- ・教科内容に関する専門性を高めるためにも、実際に使われている教科書等の分析・研究を深めておいてほし

い。

- ・個人差もあるだろうが、ワードなどのパソコン技術も必要である。
- ・児童心理学というか、子ども思考について、学んでおいてほしい。
- ・単元構成力について、「何をどこまで」、「この時間で」、「評価する力（方法、やり方）」を学んでほしい。
- ・目標と指導と評価の一体化
- ・配属学年に関する教材研究の基礎（例えば漢字の筆順）、これは板書の内容充実につながる。何気なく書いている文字も、子どもたちへの指導内容に含まれていることを意識してもらいたい。
- ・「こんな授業をしたい」と思いをもって授業づくりに取り組み、意欲が感じられた。ただ、指導目標や評価基準に沿っていない時が多々あったので、それらに即して授業を行う大切さを指導していただきたい。
- ・教科に関する知識、語彙力、恥を捨てる勇気がない。
- ・授業を行う際、子どもたちの既習内容の把握ができていない。
- ・中学校までの内容程度の基礎学力が必要だ。

◆ 学習指導の事後指導

（肯定・賞賛等）

- ・実習ノートの記録が向上した。
- ・授業を参観して、多く観点から学ぶという姿勢が素晴らしい。
- ・授業については、経験を重ねるごとに落ち着き、全体を見ての指導も可能になった。それに伴い、個別の指導についても担任の指導からの気づきをノートに記すことできた。
- ・実習授業後の指導を次回に活かそうとしているところは評価できる。
- ・学習指導ではよかった点、反省点など、具体的に振り返り、授業に活かしていた。

（意見・要望等）

なし

教科外の指導

（肯定・賞賛等）

なし

（意見・要望等）

- ・指導案の書き方や、道徳、生活科とはそもそも何か、の勉強をしておく。

資料3 意識調査における自由記述の内容の本学に対する要望等の一覧表

本学への要望・その他
<p>(肯定・賞賛等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行事等では、率先して動くなど、頑張ってくれた。来年度もお願いしたい、待っている。 ・大学の先生方には、何回も学校に出向いて実習生の様子を見ていただき、ありがとうございました ・実習が始まって3日目から宿泊研修だった。担当学年が単学級のため、職員数が少なく、戦力として活躍してもらった。これは大学での指導の賜物だと思う。とても助かった。 ・実習生の実習に対するたいへん真面目な態度に感心した。大学での指導がきちんと行き届いていると感じた。 ・二人の実習生はこの四週間、本当に一生懸命に頑張った。朝早く登校し、帰りもずいぶん遅くまで教材研究等に努力された。教師としての心構えや仕事内容、また、子どもと接する楽しさなど様々な経験を積まれた。この貴重な経験を生かして、ぜひ教師の道を歩んでほしいものである。 ・研究授業を始め、大学の指導の先生に何度も足を運んでいただき、ありがとうございました。 ・今回の実習生は素晴らしく、生活指導等も言うこともなく素晴らしかった。 ・挨拶や服装、時間厳守など、きちんと事前に指導を受けてから来られていることがよく分かった。 ・大学から何度も様子を見に来られて、大変ありがたいと思った。実習現場に足を運ばれて、情報収集をされて、改善してくださるのがよいと思う。
<p>(意見・要望等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習日誌（内容、視点）の書き方の指導が十分ではない。 ・佐賀市と西九州大学が教育実習の提携をされたとき、佐賀県の教育への寄与、地域の中での活動などがメリット部分としてあげられていたように思う。しかし、実際、学生は他県の採用をめざしていた。母校実習でなく市内の小学校で実習するメリットは、どれだけのものだろうか。受ける側（指導教員）の多大な労力に見合う「よさ」がどれだけあるのか疑問に思う。 ・どの実習生もまじめに取り組む姿が見られるが、学校現場の負担も大きいものがある。少なくとも「今年度、〇〇県・〇〇市の採用試験を受けます。」という強い意思をもった学生を出してほしい。 ・学校担当者と事前の打ち合わせのスケジュールや内容等を、早め早めにしていただけると助かる。 ・西九州大学の小学校教育実習は、当初数校指定という話だった。しかし、年々学生は増え、反対に学校の学級数は減っている。大学として実習校について、対策は考えていらっしゃるのか。 ・教育実習前の連絡の徹底。 ・事前打ち合わせをもっと早めにしていただけると大変助かる。 ・実習生の数が増えてしまうと、新採2年目、3年目等の若手教員が実習を担当することになるので、そこら辺も考えていただくとうれしい。（毎年のように新採が入ってくる状況なので） ・普段の授業以外に校内研究の提案授業や研究授業を行ったが違いにとまどっていたようです。校内研究の大まかな知識があればよかったです ・実習の時期を考えると4年生より3年生の方がいいと思う。実習後、学校とのつながりがもてるし、相談にも乗ることができる。時間は限られていますが、助言できることはいつでも相談するようにお伝えください。 ・大学生を中心に障害児ボランティア活動や音楽療法の体験教室などを行っていますので、手をつなぐ育成会に声をかけていただければと思います。西九大生にもネットワークを広げたいのでよろしくお願いします。 ・指導の先生方がとても熱心に指導していただいた。実習生のために費やした時間を労力は相当なものだった。先生方の体調が少し心配である。 ・事前訪問の際に何を確認したのか、本人たちがわかっていないようである。 ・本校では運動会当日からの実習で、学校としては厳しい時期の受け入れになっている。学級数も多くないため、指導を担当する教諭が今回は高学年しかできない状況だった。時期・人数等で今の実施が継続するようであれば、早めに大学からの説明をお願いします。 ・事前訪問の際の確認事項を、大学側でしっかりと伝えてほしい。

- ・時期的には、行事が続き、実習として授業を進めるには厳しい状況にあったと思う。また、単学級も増えており、指導を担当とする教諭の負担も大きかったように思う。
- ・給食を食べるので、アレルギー等の有無や情報を教えてほしい。
- ・指導案作成の力に個人差がかなりあると感じる。実習までに自分一人で指導案を作成し、模擬授業などの経験があるのとないのでは、大きな差が出ると思う。グループやペアでの作成だけではなく、個人での作成と模擬授業の実施で、実習のレベルが大きく上がるのではと思う。
- ・教職につきたいという学生ばかりではないでしょうが、教員採用試験まであと一か月というときに教育実習が終わる。学生にとって厳しい。これまで佐賀県の教員の正式採用はなかなか難しかったと思う。しかし、大量退職の時代が始まるので、このチャンスを生かす工夫が大事だと考える。
- ・教育実習の時期について考えてほしい。(実習と採用試験の日があまりにも近いので、不利になるのではと心配している。採用試験の筆記試験の勉強が十分にできない。)
- ・指導されているとは思いますが、学生どうして模擬授業をするなどの活動・演習の経験があればと思う。
- ・今回の実習生はまじめに取り組み、自分なりに課題を見つけながら、改善を目指す姿勢がみられ、実際に成長を感じることができたが、中にはそれほど「教師になりたい」という思いもなく、単位確保のための実習に来るといった学生もいるように聞いている。将来、教師を目指す夢と熱意をもった若者を実習生として受け入れられるよう指導してほしい。
- ・大学の先生が来られる日を知らせてほしい。こちらもその日に合わせて日程を考えられると思う。授業もされない、何も様子がわからない時に来られてもと思うことがあった。
- ・通勤で、車で来ていいかすぐ聴かれた。実習では公共交通機関が原則であることが浸透していない。
- ・大学の先生が自分の授業優先で、見に来た時に実習生の授業ではなく子どもとのかかわりが少ない時に来られるので、実習生もがっかりしていた。
- ・教員採用試験前に保育園実習もあると聞いた。合格者を増やしたいなら、直前の実習を控え、採用試験対策を行った方がよいのでは。
- ・事前指導をきちんとして実習に出していただき、また、実習中は何度も参観に来ていただき、大学の本気度がわかった。なかなか難しいと思うが、「絶対に教師になりたい」という学生には、どんなに指導が必要でも私たちが先輩にそのようにしていただいたように、一生懸命に対応させていただきたいと思う。しかし、ご存知のように現在の学校現場には「免許だけは取っておこう」という実習生を受け入れる余裕はない。事前の覚悟を今一度、学生に確認いただきたい。
- ・実習生が一人配置だったため、刺激し合ったり、勉強し合ったり(互いの授業を見る)することができなかった。以前、実習生が二人だったことと比べると、実習の充実度が違ったように感じた。
- ・大学の模擬授業がホワイトボード使用だったそうなので、黒板の方がいい。
- ・本校も学校規模が小さく、今年度すべて単学級となり職員数も減である。そのため、様々な面で職員の負担は増えている。実習生の受け入れは、指導する職員にとっても学びの場であり、児童にとっては良い刺激となっているが、校務運営上、なかなか厳しいところである。また、複数学級であれば比較して学べる点も、本校の現状ではできない。結論としては、今後の受け入れは、厳しいものとなりそうである。
- ・実習生がプリンターをもっておらず苦労していた。自分の出身大学では、夜に実習生が集まり、相談しながら授業を考え、準備することができた。大学側は、印刷機やコピー機を提供してくれた。一つの学校に来る実習生が少ないため、学校側で十分対応可能だが、実習生の気持ちを考えると、そういうハード面のサポートも必要であると思う。(とても申し訳なさそうに実習生が毎回プリントアウトをお願いしていた。)
- ・本校のような大規模校においては、母校実習が毎年数名ありますので、受け入れ人数としては、2～3人が精一杯の状況である。
- ・実習生の評価・評定については、内容が細かすぎると思う。もっと簡単な評価でないと、現場では対応が非常に難しくなっている。たださえ、実習を受け入れる学級担任が少なくなっているのが、本校の現状である。子どもたちの通知表をつけるような評価・評定をする意味を教えてくださいたいと思う。大学側の知りたいことがどこにあるのか。

- ・担当教員も本気になって指導している。加えて、校長、教頭、主幹、教務も必死で指導している。それは、ぜひ佐賀県の小学校教員になってほしいという思いからである。取得免許希望を事前調査して、幼保園や小学校の振り分けをしていただけたら助かる。
- ・「教育実習意識調査」について、このような意識調査は、数年に一度でよいのではないかと思う。また、教育実習生の評価と似ているので、同じことを二度行っているような気になる。さらに、校長、教頭が実習担当者、指導教員の3名に記入依頼が来ている。3名に依頼する理由を教えてください。何を求めているのか、知りたい。
- ・研究授業には大学から参観に来ていただきたい。
- ・実習評価表を簡略化してほしい。今のままの項目だと、各校の共有化が困難である。
- ・実習校へどのような気持ちで出向くべきなのか。また、指導案の書き方等、もう少し指導をしておいていただくとうありがたい。
- ・一生懸命授業をされていたので、ぜひ大学の先生にも参観していただければと思う。
- ・研究授業には大学からも見に来ていただきたい。
- ・教育実習は、大学での講義等では学べない場ということを踏まえて、「実習についての目標をより具体的に、明確にもってほしい」、「子どもたちとのかかわりを深めるという点から、もっともっと共に遊んでほしい」、「『ノウハウを学ぶ』のではなく、『学校という場での子どもの見取り』を自分なりに行ってほしい」（最近の若手職員には、評論家的な考えがあるのでは？と感じている。）等を願っている。
- ・新規採用者の（超）早期退職が続き、学校と職員の間「何か」が生じていると感じる。何か課題があっても、誠実な態度で行動し、どんどん先輩方に聞いてほしいと思う。
- ・指導案作成上、「教育実習の記録」ノートの中の「授業観察記録」の授業者・学習者の欄を含め、観察記録は指導案の形式に準じて揃えてほしい。※参観記録作成が指導案作成のための練習となりえる。
- ・成績評価の「教科外の指導」の範囲がわからない。